

フークトープ通信 63

詩人としての野村俊夫

菅野俊之(福島市)



『北方詩人』は昭和2年に創刊され、戦前期東北を代表する詩誌の一つである。福島県内の詩人のみならず、高村光太郎ら著名詩人の寄稿も多い。同8年に発行された2巻7号に宮澤賢治が生前最後に送稿した詩「産業組合青年會」が掲載されたことは特筆されるけれどなんと、賢治の詩篇の次に載った詩は野村俊夫「羽を擴げる噴水」なのだ。当時の摩登イズムの影響を感じさせる作品である。宮澤賢治と名前を並べた野村俊夫は福島市出身で、〈暁に祈る〉〈湯の町エレジー〉などのヒット曲で知られる作詞家。NHKの朝ドラ「エール」では古山裕一(古関裕而がモデル)の幼馴染、親友として村野鉄男の名で登場していた。

俊夫は当初、詩人を志していたのである。『北方詩人』や『福島民友新聞』等に彼の詩篇が残されている。やがて彼は生活のためあつて歌謡曲を作詞するようになり、

古関裕而や古賀政男たちの作曲によって多数のレコードをリリースした。昭和10年、古関裕而の作曲により発売された〈野茨の花〉の楽譜ピースがポチ文庫にあるので、表紙写真を掲載しておく。2番までしかない短い歌詞だ。

たそがれの風に吹かるゝ

野茨(のばら)の花の白さに

何故か哀しく泣いた日も 遠い夢

空の涯(はて) 夕月あはく

うつろなるため息に似て

儚なくも散る野茨の 白い花

歌謡曲というよりも歌曲みたいで、ポエティックかつ抒情的な歌詞である。詩人としての俊夫の作風を窺うことができよう。

戦後の彼の代表作は何と言っても、島倉千代子の歌った〈東京だヨおっ母さん〉だ。1番と3番の歌詞を聴く限りでは、田舎から上京してきた老母を若い娘が東京見物の案内をするというだけの歌だが、俊夫の巧妙な作意は2番の歌詞にある。

やさしかった 兄さんが 田舎の話を 聞きたいと

桜の下で さぞかし待つたら おっ母さん

あれが あれが 九段坂 逢ったら泣くでしょ 兄さんも昭和32年、最初のレコードでは「待つたら」の箇所をなぜか千代子は「寒かろ」と歌っているが、これは先の大戦で桜のごとく散り九段坂、つまり靖国神社に英霊として祀られている兄をその母と妹が訪う鎮魂歌なのだ。島倉千代子の歌詞の言葉一つひとつに籠められた意味を深く繊細に表現する神がかった歌唱力と相俟って、作詞家にして詩人でもあつた野村俊夫の真骨頂を示す名曲である。